
バイエルン革命と文学

野村 修



白水社

白水叢書 52
バイエルン革命と文学

定価 一五〇〇円

一九八一年一月二〇日印刷
一九八一年二月五日発行

著者 © 野村 修のむら おさむ

発行者 中森 季雄

印刷者 山岸 真純

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話 営業部 〇三(元)七七八一
編集部 〇三(元)七八二一

振替 東京 九一三三二二八

郵便番号 一〇一

著者略歴

一九三〇年生

一九五三年京大卒

ドイツ文学専攻

京大教授

主要著書

「スウェンホルの対話」

「ベンヤミンの生涯」

主要編訳書

「ドイツ革命」

「ブレヒトの詩」

ベンヤミン「暴力批判論」

(分) 1330 (製) 90520 (出) 6911

三秀舎印刷・加瀬製本

バイエルン革命と文学

野村 修

バイエルン革命と文学
目次

序章	水死したむすめの歌	7
I	一九一八年一月七日	31
	初期ブレヒトの二つの詩	
	リルケとトーマス・マン	
II	青春 戦争と革命 歳の市	59
	ブレヒト その一	
III	歌『パール』『夜打つ太鼓』	91
	ブレヒト その二	
IV	シュヴァービングのひとびと	125
	ミューザームとグラーフ	

V	嵐と夢	155
---	-----	-----

マルトからトラーヴェンへ

VI	ある選ばれた生涯	179
----	----------	-----

エルンスト・トラー

終章	革命行動と倫理	209
----	---------	-----

そしてブレヒト

付記		235
----	--	-----

人名索引		i
------	--	---

序章

水死したむすめの歌

初期ブレヒトの二つの詩

ベルリンに行ったら、動物園のかわうそを見たいと思っていた。といっても、ぼくが動物ずきというわけではない。一五年ほどまえに続けていたヴァルター・ベンヤミンを読む会で、友人の小寺昭次郎が訳読してくれた『ベルリンの幼年時代』の一章「川獺」が、心に残っていたからである。雨の日にかわうその檻の前に立ち、「漆黒に光るその体軀が躍り出たかと思うと、たちまち身をひるがえして水底の急ぎの仕事に引き返してゆくのを見るために、ながいあいだ待ちつづけ」ている少年のすがたが、そこには忘れがたい夢のひとこまのように、印象的にえがきだされていた。

少年のベンヤミンは動物園にしばしばかよった。かれの生家があったマクデブルク広場から園の入口までは、二キロメートルにみたない。しかもその道はラントヴェーア運河に沿っていて、運河の南岸のリュツォー河岸通りには、その名まえがかれにとって「同じ年頃の子どもたちのなかで、死のアクセントが打たれるのを聞いた最初の名まえだった」少女の家も見えた。たぶんかれは、ベンドラー橋から運河の北岸を西へ歩き、河水の「一条の帯」をへだてて少女の家のかたわらを過ぎてから、リヒテンシュタイン橋を動物園のほうへ渡ったのだろう。「川獺」の章にはこう書かれている。「動物園の三つの門のうち、川獺にいちばん近かったのは、リヒテンシュタイ

ン橋のたもとにあるそれであった。これはまったくのところ、利用されることのもっとも少ない門であつて、それにまた、動物園のなかでも死に絶えたような個所に通じていた。」（小寺訳）

一九七四年のある雨もよいの日に、ぼくはマクデブルク広場へ出かけ、そこからいま想定した道筋を歩いた。ヴァルター少年が歩いてから四分の三世紀ののちになる。その間に大戦が、革命の敗北が、ナチの支配が、またもういちど大戦があつたけれども、運河そのもののたたずまいはさほど變つていないかもしれない。水はおそらく昔のままに暗く、重たげであり、だるま船がときおり過ぎてゆく。兩岸には並木。右手にはティーアガルテンの緑が見え、左手には市街がひろがつている。

リヒテンシュタイン橋はしかし、いまはもうなくなっている。その橋のたもとにあつたという動物園の入口も廃止された。だから園へはいるには、少し戻つて別の橋を渡り、ブダペスト街から南門へ廻らなくてはならぬ。その周辺はホテル街で、いまはヒルトン・ホテルが目立っているが、かつては動物園の南門のはすむかに、あのエデン・ホテルがあつたはずだ。

かわうそには逢えなかった。「死に絶えたような個所」をもとめて園内をさんさん探したが見あたらず、やむなく飼育係とおぼしい初老のひとに、「かわうそはどこですか？」とたずねてみたら、かれは「かわうそ？」と首をかしげ、「ここにはいませんよ」と答えた。いつからなのだろう。あるいはかれも、第二次大戦の犠牲となつたのだろうか、かれをえがいたベンヤミンそのひとと



ラントヴェーア運河

同じように？

運河のほとりでぼくが考えたのは、だがベンヤミンの幼年時だけではなかった。かれの『幼年時代』が書かれたのは三〇年代の初め、ナチズムがドイツを席捲しつつあった時期である。それはいくつかの新聞紙上に分載された。「川獺」の章は、一九三三年三月二日の『フランクフルト新聞』に載ったが、これはいうまでもなく国会放火事件の直後で、ベンヤミンはその半月後に亡命に踏みきっている。また、リュツォー河岸に住んでいた死んだ少女の回想をふくむ一章、「クノッ

ヘ氏とプーファール嬢」が発表されたのは同年六月一六日の『フォス新聞』紙上であって、すでに亡命地にあった作者はこの文章に、デートレフ・ホルツという仮空の筆者名を添えなくてはならなかった。

とすれば、読者はともかくとして作者の脳裡には、リュツォー河岸とかリヒテンシュタイン橋とか書き記すときに、別のひとつの忘れえぬ名がよみがえり、身動きして

いなかっただろうか。すなわち、ナチ支配下のドイツでは公然と追悼されることが不可能だった死者、ローザ・ルクセンブルクの名が。

一九一九年一月一五日の夜、エデン・ホテルの裏口から走りだした一台の自動車、ブダペスト街からリュツォー河岸へ廻りこみ、運河に沿ってリヒテンシュタイン橋の数十メートル手前まで来て、とまった。動物園のさびれた門の近くになる。車からは将校をふくむ数人の兵員がおりてきて、茂みをこえて運河に近づき、「女性の毛髪のある人体」を水に投げこんだ。橋の上には哨兵がいたが、かれはそのからだの水面上にうかんだまま橋の下を流れすぎ、やがて消えてゆくのを見た、という。

これは、社会民主党政府が公認した旧軍部反革命集団によって、カール・リープクネヒトとともに無法に捕えられ、虐殺されたローザの遺体だった。二人への兇行は秘密裡に計画され、遂行されたのだが、噂の急速なひろがりには防げなかった。いや、むしろ犯人たち自身が手柄顔でしゃべってまわった、ということもありえよう。じぶんらが罰せられないことに、かれらは確信をもっていたのだから（じじつ、かれらはほとんど罰せられなかった）。——とにかく、ローザの遺体が運河に沈んだことは、数日のうちに新聞にも報道されて、ひろく知れわたった。

そのからだは、しかしじつに四ヵ月半ものあいだ、誰の眼にも触れなかった。それはどこを流れていたのだろうか？ かの女はまだ生きている、潜伏している、というささやきが、風のなかを

流れたほどだった。ようやく五月三十一日の夜にいたって、かの女の肉体はフライアルヘン橋の近くに漂着する。奇妙といおうか、そこはリュツォー河岸より数キロメートル上流の地点である。運河には川のような流れはない、と考えるなら、ふしぎではないのかもしれないが。遺体はかなり腐爛していて、すぐには誰だと思分けられなかった。

ぼくは思いますが、ベンヤミンよりわずか若く、一九一九年に二〇歳の無名の詩人だったベルト・ブレヒトが、ローザと革命の敗北とを悼む「くれないのローザのバラード」を書いた、といわれていることを。この詩はしかし残されていず、ぼくらはかれの友人ハンス・O・ミュンステラーの回想をつうじて、そのうちのわずか四行を知るにすぎない。

革命のくれないの旗は

とうに屋根々々から吹き払われた……

くれないのローザは

泳いでいった、ただひとり解放されて。

ブレヒトが生涯のあいだローザに関心をいだきつづけたことは、かの女の墓碑銘のかたちを

とった二篇の短詩や、かの女をヒロインとする戯曲の構想があることから、確實といえる。なら、かれがこのバラードを破棄したのはなぜだろう？ ミュンヒェン評議會共和國壊滅後のバイエルンの情勢が、これをみずから湮滅するほどの慎重さを、かれに強いたからなのか？ だがそうしたら、「死んだ兵士の伝説」や「赤軍兵士の歌」だって、似たようなものだ。それとまたんに、意にみたぬ作品だったからなのか？

ラントヴェーア運河の水面にたつさなみを眺めながら、ぼくはまえまえからのこの疑問が、解けた、と思った。そうだ、ローザを悼むブレヒトのバラードは、ちゃんと現存しているではないか。どうして気がつかなかったのか。「くれないのローザのバラード」は換骨奪胎されて、翌一九二〇年に成立したバラード「水死したむすめについて」に、生まれかわっている。むしろそこでは、水死した女性は無名であり、必ずしもローザを意味しない。オフェーリアそのほかの数かずの女の影が、そこにはまつわっている。けれどもそこには、たしかにローザの影もある。いかえればこの詩は、一九一九年一月の経験を経た詩人によってのみ、書かれることができたのだ。

水死したむすめについて

1

かの女がおぼれて死んで、小川から
川へと流されていったとき、じつに異様に
空のオパールは冴えていた、さながら
なきがらをなだめるためのように。

2

浮きくさが藻が身に絡みついてきて
かの女は少し重くなる、やがてずつしり重い。
冷たく、魚が素足に触れて泳いで
生きものに阻まれ、最後の旅路もなお遠い。

3

ゆうぐれに空はくろずむ、煙のよう、
夜にはゆらめく、星くずのうすらあかり。
だが朝、空は明るむ、どうしてだろう